

言語科学

をめざして

Issues on anaphora in Japanese

possible only if:
 precedes b at PF
 and b are not co-arguments

marked [+Dep]

particular Hypotheses about
 correspondences

corresponds to

can be marked [+Dep], but \bar{a} -MPs cannot

ences

(2-1)



(BUACA, B) is possible only if
 FD(LF(A), LF(B)).

(BUACA, B) is understood
 linguistic intuitions (of
 interpretation) such that
 singular-denoting and

$\Sigma = \{ \bar{a}, \bar{b} \}$ LF(\bar{a})

0	0	0	0	0
1	2	3	4	5

LF

\therefore in $E \dots B \dots] ga A o \checkmark$
 (LFA) does not c-command LF(B).

(2-1)
 \therefore in $A ga (\dots B \dots) o \checkmark$
 (LFA) does not c-command LF(B).

言語科学をめざして
—Issues on anaphora in Japanese

Sample

傍士 元 著

上山あゆみ・田窪行則 編

大隅書店

本書は、現在南カリフォルニア大学の言語学科で教鞭をとっておられる傍士元氏の論文集である。氏の還暦を記念して、九州大学言語学科の上山あゆみ氏が傍士氏のこれまでに発表された論文のなかから1つのテーマとしてまとまりのあるもの、傍士氏の研究を代表するものを選び、編集されたものである。

傍士氏は、日本語を対象として研究する生成文法学者として私が最も尊敬する研究者の1人である。氏は現在自分の研究方法を生成文法ではなく、言語機能科学 (Language Faculty Science) と呼んでいる。これは「言語機能の解明を真に目指す科学」という意味であり、チョムスキーが生成文法を創始した際の当初の目的をより明示的に表す命名である。傍士氏は、生成文法を厳密科学 (つまり物理学などの普通の科学) として研究することを「本気」でやろうとしている非常に少数の1人であると言える。氏は、1985年の博士論文執筆以来、嘗々と自分の研究能力、分析能力を高め、科学方法論を学び、物理学をはじめとする他の経験科学と同じ水準で生成文法を研究するためには何がなされなければならないかを追求してきている。氏の研究に対する高い目標と、そのストイックな態度、どこまでも真理のみを追求する厳しい姿勢から、故黒田成幸氏は、氏の研究グループを傍士道場と呼んでいた。

傍士氏と私が最初に会ったのは、1990年で、氏が関西言語学会の招きで講演を行った時のことである。氏は、800ページにもなる大著の原稿を書き終えたばかりで、精力的な講演活動を行い、その際大阪で開かれた国際韓

国語学会でも招待講演を行っていた。氏は当時、束縛理論に関わる仮説を日本語において検証するためには、どのような語彙を用いるべきかという点に腐心していた。英語では、再帰代名詞は構造的に近い位置に先行詞がなければならず (束縛理論A)、逆に人称代名詞は構造的に近い位置に先行詞があつてはならない (束縛理論B) とされている。

*John thinks that Mary recommended himself.

(*he=him* という解釈で) *He recommended him.

ところが、日本語でこれらに対応する語として考えられていた「自分」や「彼」を用いると、結果はまったく逆になってしまう。

^{ok}ジョンはメアリが自分を推薦したと思っている。

(「彼が」=「彼を」という解釈で) ^{ok}彼が彼を推薦した。

また、英語の人称代名詞は、特定の個人を指すのではなく、先行詞と1対1対応で値が連動する読み (束縛変項照応) を簡単に許すが、「彼」を用いると、たいていの話者にとっては、この読みは不可能である。

Every teacher recommended his student.

すべての先生が彼の学生を推薦した。

日本語において束縛理論に関わる仮説の検証には単に英語での観察を翻訳するだけでは全く不十分であることを傍士氏は強く意識していた。この局面を打開するためには、あらためて束縛理論が扱うべき事象の本質を深く掘り下げ、それまでの英語の研究も包摂する形で組み立てなおさなければならない。結果的に、氏のこの問題意識は現在まで貫かれており、(i) 束縛変項照応の条件とは何か、(ii) 束縛理論Bと呼ばれてきた現象はどのようにとらえるべきか、という問題が、本書に収録されたすべての論文に共通す

るテーマとなっている。この2つの問題は、英語の研究者から見ると、すでに「一定の答え」が出た問題であり、1990年代以降、どんどん論じられることが少なくなっている。しかし、傍士氏が長年主張してきたように、英語における議論の収束は、問題の真の解決を意味しない。英語の研究者には見えない問題点が見えるからこそ、他の言語の研究者が議論を進めていかなければならないのである。

傍士氏は、束縛とは何かという理解を深めるために、まず、Reinhart (1976, 1983ab)の立場に立って考察を開始した。本書の中でも、頻繁にbinding (束縛)とcoreference (同一指示)の違いについてふれられているが、この区別は、Reinhartの主張を引き継いだものである。余裕があれば、Reinhart 1983bを読むことによって、傍士氏の論文への理解を深めることができるだろう。

さて、「彼」が束縛変項照応を簡単には許さないということを受けて、1990年前後から傍士氏が注目しはじめたのが、ソ系列の指示詞であった。氏の研究は、ソ系列の指示詞を利用することによって、一気に具体的に発展しはじめた。その頃、私は、指示詞コソアの文法的・語用論的・歴史的側面について総合的に金水敏氏とともに研究を進めていたため、1990年の氏の来日の際には、私たちに共同研究の申し入れがあった。その時は、氏の考えている対立はあまり実感できなかったのだが、生成文法の厳密な理論展開と、私たちの指示詞の研究との間に具体的な接点を指摘されたことが新鮮で、これがきっかけとなって、氏の研究に注目をしていくことになった。

その後、1994年にアメリカ西海岸を回った時に傍士氏宅を訪れ、上山氏を交えて生成文法について夜を徹して語り、氏が目指していることがすこしずつわかってきた。この時、上山氏はロチェスター大学にいたのだが、指導教授が他大学に移ってしまい、MITにヴィジターとして滞在しながら、その後誰に指導を受けるか迷っていた。その頃NELS(North East Linguistic Society)で発表する準備をしていた傍士氏のハンドアウトづくりを手伝うことになり、これを契機に傍士氏のもとで指導を受けることになる。本書の第1章が、その時の発表がもとになった論文である。傍士氏は、日本語の束縛変項照応において束縛理論Bの効果が観察される場合と観察されない

場合との違いを検討して、後者の場合には、少し特殊なタイプな束縛(Dem-binding)が関わっているという仮説を述べた。特筆すべきは、その仮説に基づいて英語の現象を分析している点である。これまで束縛理論Bというと、人称代名詞が関わる例しか議論されなかったのに対して、本論文では、that linguistやthe linguist、そしてthatのような表現を用いて束縛理論Bの検証が行われており、その予測の正確さがおおいに英語研究者たちを驚かせたと聞いている。ただし、この論文では、Dem-bindingというものがどのようなものであるかについては、あまり述べられていなかった。2つの束縛関係の条件の違いを画期的に発展させたものが上山氏の博士論文である。

1994年から傍士氏と本格的に共同研究を始めた私は、1996年から傍士氏と氏の南カリフォルニア大学の同僚たちと科学研究費による国際共同研究を始める。この頃書かれたのが本書第2章のNull Object and Sloppy Identityである。この論文は、Otani & Whitmanによる日本語の名詞句の省略を動詞句の省略で説明しようとする分析の批判である。「Xが自分の本を読んだ」「Yも読んだ」のような文で、目的語が省略されている文も「自分」の先行詞をYと取る解釈が可能である。英語では動詞句の削除の際にこのような現象が起きるため、Otani & Whitmanは、英語と同じように動詞句の省略があると考えた。彼らは日本語では動詞自体は存在しているので、動詞を時制接辞に「繰り上げ」、動詞がなくなって目的語だけになった「動詞句」を削除することで求める一般化を得る。

傍士氏のこの論文は、彼らの議論がどのような形で成り立たないかを非常に緻密な議論と詳細な例により示している。私はこの論文を読んで、言語現象を深く、正確に観察し、理論仮説とそれから演繹される理論予測と言語現象との一致を追求するという傍士氏の方法の厳密性に非常に感動した。私の関係した岩波講座『言語の科学』第1巻で、経験科学としての生成文法の方法を概説する際に氏のこの論文を詳しく紹介している。

1996年2月から8月まで、私はロスアンジェルス近郊にあるカリフォルニア大学アーバイン校に客員研究員として滞在する。到着早々当地で第15回のWest Coast Conference on Formal Linguisticsが開催された。この時傍士氏

が発表したのが、本書第3章 Sloppy Identity and Formal Dependency のもととなる論文であった。この論文および、第4章の Sloppy Identity and Principle B では、ソ系列指示詞の「発見」とともにいったん打ち捨てられた「彼」という表現が省略構文における束縛変項照応を観察する場合には有効であるということが発見されたことが大きい。また、この時期以降、Formal Dependency (FD) というキーワードが頻繁に言及されることになる。これは、構造条件としては Reinhart 1983ab の同一指標付与 (coindexation) と同じであるが、その関係に階層的非対称性を取り込んだものである。

同じ1996年12月に、上記の国際共同研究の一環として傍士氏の企画でカリフォルニア大学ロスアンジェルス校で開催された日本語／韓国語言語学会議 (J/K conference) で、指示詞に関するワークショップを行い、金水敏氏と私、傍士氏の3人で指示詞に関する発表を行った。この時の傍士氏の発表が第5章の Formal Dependency, Organization of Grammar, and Japanese Demonstratives である。第3、4章が、Formal Dependency の概念的な特徴づけと理論的な位置づけを行っていて、より抽象的であるのに対して、第5章はFDによる束縛変項解釈とFDによらない同一指示 (coreference) との違いが、的確な例文とともに非常に明確に示されている。

第6章も私との国際共同研究および上山氏の科学研究費補助金でなされたものである。省略構文における surface anaphora と deep anaphora の違いを扱いながら傍士氏の理論を示したもので、第2-5章のまとめた位置づけを与えることができるかもしれない。surface anaphora というのは、その省略部分の解釈に言語表現の構造自体のコピーが関わるもので、deep anaphora というのは、その省略部分の解釈が必ずしも言語的な先行表現によらず、ジェスチャー、視線、共有知識などによって理解されるものである。sloppy reading が関わる現象を見る場合、deep anaphora と surface anaphora を混同すると正しい観察ができなくなる。本章で、傍士氏は格助詞付きの比較構文 [名詞句-に よりもさきに] という構造を使って、surface anaphora の解釈が強制されるように工夫して実験を行っている。格助詞を使うことで、言語構造を復元しなければ解釈できない環境を作りだしているわけである。

傍士氏の実験は言語表現そのものの構造に関わる違いが明確にテストできるようにデザインされ、再現性が保証できるような工夫がされている。

第7章は、第1-6章の方法論的な裏付けを行ったものである。生成文法はこれまで例文の判断により理論の検証を行っているわけであるが、例文の判断を理論の検証に使うということの本質的な意味、役割について理論的な裏付けをした研究はほとんどなかったといえる。本章では、理論に対する検証として、例文の判断がどのようなものであれば反証可能で再現性の高い検証として使えるのかを非常に具体的に述べている。この論文も私は非常に感銘を受け、その最初の頃のバージョンを2001年の6月から7月にかけてカリフォルニア大学サンタバーバラ校で行われたアメリカ言語学会の夏期講習会の講義資料として使った。現在のバージョンはその時の倍以上の長さになり、議論が精緻になっている。傍士氏は現在、生得的言語機能によって形成される人間言語の計算メカニズムの解明を言語機能科学という厳密科学として研究できるようにするための方法論の構築にその研究時間のほとんどを割いている。その成果はすでにいくつかの論文で垣間見ることができるが、現在新しい著作を準備中で、本年度には出版予定である。その著作が完成した暁には、第7章はその導入となることができるであろう。

傍士氏はそれほど多くの論文を出版しているわけではないので寡作の研究者と思われるがちであるが、間近で氏の仕事を見ているものはみなその膨大な原稿作成能力に圧倒される。1990年の原稿は完成していたにもかかわらず結局出版されなかった。それ以後の研究論文と比べてその質の高さを知っているものはみなこの原稿がなぜ出版されなかったのかを不思議に思い、残念に思っている。また、本書の脚注にあげられている *Formal Dependency and Organization of Grammar* は3章ほどが書かれ、頓挫した。そのあとで2009年に書かれた *A Foundation of Generative Grammar as an Empirical Science* と題された原稿も、いったんは完成し、査読者から好意的な評を受けたにもかかわらず、査読者の書き直しの条件は単純な書き直しにはとどまらぬと判断して、新しい本を書く決心をしてしまった。これらの本の原稿だけで1200

ページほどにはなるであろう。これらの原稿が本として一冊でも出版されていれば、日本語生成文法の現在は変わっていたかもしれないことを思うと残念でならない。

本書の出版により、すこしでもいまの日本語に関する生成文法の状況が変わることを願ってならない。本書の企画、編集をされた上山氏の労を多としたい。また、上山氏は本まえがきの執筆にも多大な援助をされた。ここに感謝したい。本書は、英文の解説を傍士氏自身がつけた版が電子書籍の形で出版されると聞いている。本書のような高度の英文の専門書を出版することによってくださった大隅書店の大隅直人氏には感謝してもしきれない。

田窪行則

田窪行則 (たくぼ・ゆきのり)

1950年生まれ。京都大学大学院文学研究科教授。

目次

まえがき 田窪行則	ii
Table of Contents	x
Chapter 1: Demonstrative Binding and Principle B	1
Chapter 2: Null Object and Sloppy Identity in Japanese	23
Chapter 3: Sloppy Identity and Formal Dependency	53
Chapter 4: Sloppy Identity and Principle B	69
Chapter 5: Formal Dependency, Organization of Grammar, and Japanese Demonstratives	97
Chapter 6: Surface and Deep Anaphora, Sloppy Identity, and Experiments in Syntax	123
Chapter 7: Falsifiability and Repeatability in Generative Grammar: A Case Study of Anaphora and Scope Dependency in Japanese	185
Index	261
Abbreviations	261
General	261
Interpretations(-related)	264
Constraints(-related)	265
Bindecs(-related)	266
Construction Names	267
Japanese words	267
English words	268
Author Names	268
Hoji 先生の言語学者としての軌跡——年譜にかえて 上山あゆみ	272
あとがき 上山あゆみ	280

Hoji先生の 言語学者としての軌跡 —— 年譜にかえて ——

記念論文集においては、しばしば年譜もしくは業績目録が載せられるが、単にデータの一覧を載せても味気ないので、ここでは、言語学者としてのHoji先生のこれまでの軌跡を、上山がご本人から聞いた話に基づいて綴ってみたい。どうしても随所に語り手および書き手の主観が入るだろうとは思われるが、なるべく客観的な記述を目指して、以下では、普段の呼称の「Hoji先生」ではなく、「Hoji氏」という呼称を用いることにする。

◆ 留学前

Hoji氏は、日本では言語学を学んでいない。大学は経済学部であり、時代的にもマルクス経済学が盛んであった時期であるが、「ほとんど大学の勉強はしていなかった」らしい。ただ、その頃から、英語については、かなり時間を費やしていた。友人たちと一緒に、自分たちの発音を1語1語録

音してネイティブの発音と比べて練習を繰り返したり、ネイティブの先生のお宅に下宿をして、英語で普段の生活をしたりしていたそうなので、留学前から、すでに相当な英語力だったのだろうと推測される。

◆ 1976年から1981年：言語学との出会い

ワシントン州シアトルのワシントン大学に留学したのは1976年の秋であった。その時点では、日本で英語の先生になるために、アメリカでESL (English as a Second Language) の修士号でも持っていると言職がしやすいのではないかと、というぐらいの気持ちだったという。しかし、そこでSol Saporta氏との出会いがあり、言語学への一歩を踏み出す。

Sol Saporta氏は、学部と大学院の中間レベルにあたる授業として、Chomskyの*Reflections on Language*とKuhnの*The Structure of Scientific Revolutions*をテキストとする講義を行っていた。Hoji氏は、そこで初めて生成文法の考え方にふれ、おおいに興味をかきたてられた。その授業には、その後も単位と関係なく何度も出席し、そのたびごとに、新しい発見があったという。Hoji氏の言語学との出会いの最初が、このような科学哲学的な考察であったというのは、今から考えても興味深い。

しかし、その後の展開は、必ずしもスムーズではなかった。生成文法の方法論の議論や、いわゆる初級の練習問題については、何の問題もなかったが、Joe Emonds¹やJohn Ross²による研究についての検討になると、英語の細かい語感がなければ納得できない議論が多くなり、次第に初期のころの興奮が薄れてくる。ダメ押しとなったのがChomsky & Lasnik 1977の"Filters

¹ Emonds, Joseph E. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*, Academic Press, New York.

² Ross, John Robert (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology, Cambridge.

and Control"³であった。そこに書かれてあった主張は、Hoji氏には、どう考えても普遍文法 (Universal Grammar) についての提案だとは思えず、生成文法という営みに対して完全に失望してしまい、その後、しばらくHoji氏は、「やさぐれて」過ごすこととなる。

◆1981年から1985年：博士論文の完成まで

そこに転機をもたらしたのが、Chomsky 1981のLGB⁴であった。"Filters and Control"でいったん見放してしまっていた生成文法であるが、LGBでは、「お、Chomskyも、また少し本気になってきたな」と意気込みを感じ、全編に渡って、細かくカードを取りながら精読を始める。その頃までは1.5以上あった視力が、この時期から急に悪くなり、メガネが要るようになってしまったらしい。

その後、Hoji氏は1982年から1年間、研究生 (Research Affiliate) としてMITに行った。当時、Mamoru Saito氏が2年生、Naoki Fukui氏が1年生として在学していた。また、Shigeru Miyagawa氏も visitor としてMITに来ている時期であった。

Chomsky氏の授業では、ちょうど提出されたばかりのJames Huangの博士論文⁵が取り上げられていた。英語についての議論の場合には、日本語に置き換えてもピンと来ないものが多かったのに対して、ここで扱われている現象は、日本語で考えても納得できるものが多く、その影響で、Hoji氏は、まず、解釈におけるc-command関係の有無という点に着目することになる。

³ Chomsky, Noam, & Howard Lasnik (1977) "Filters and Control," *Linguistic Inquiry* 8, pp.425-504.

⁴ Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding: The Pisa Lectures*, Foris, Dordrecht.

⁵ Huang, C.-T. James (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology, Cambridge.

ある日、Hoji氏が日本語でいろいろな例を考えていた際、ふと、語順によって解釈の容認性が異なるように思われるケースに遭遇した。そのことをMamoru Saito氏に聞いてみた――

Hoji氏 「ねえ、Saitoさん、この文、とれなくなるよねえ。どうしてかなあ。」

Saito氏 「あ！ Hojiさん、これはweak crossoverだよ。」

Hoji氏 「へえ。で、weak crossoverって何？」

Saito氏 「weak crossoverっていうのはね、… (以下、略)」

この会話をきっかけとしてMamoru Saito氏を書き上げたのがSaito & Hoji 1983⁶である。

また、別のある日、Hoji氏がそのweak crossoverの例文について考えていたところ、weak crossoverの構文になっているはずであるにもかかわらず、容認できる場合があることに気がつき、またSaito氏に相談する――

Hoji氏 「ねえ、Saitoさん、この文、weak crossoverなのに、とれるよねえ？」

Saito氏 「あ！ Hojiさん、これはparasitic gapだよ。」

Hoji氏 「ああ、そう。で、parasitic gapって何？」

Saito氏 「parasitic gapっていうのはね、… (以下、略)」

このときの発見に基づいて書かれたのがHoji 1987⁷であり、博士論文であるHoji 1985⁸は、Hoji 1987に書かれている問題意識を展開したものである。まさに、Hoji 1985は、Huang 1982を苗床とし、Mamoru Saito氏の助力のおかげで結実したと言えるだろう。

⁶ Saito, Mamoru, & Hajime Hoji (1983) "Weak Crossover and Move α in Japanese," *Natural Language and Linguistic Theory* 1, pp.245-259.

⁷ Hoji, Hajime (1987) "Weak Crossover and Japanese Phrase Structure," in T. Imai and M. Saito, eds., *Issues in Japanese Linguistics*, Foris Publication, Dordrecht, pp. 163-201. この本が発行されたのは1987年であるが、この論文が実際に書かれたのは1984年ごろであり、これがHoji 1985のchapter 2のもとになっている。

⁸ Hoji, Hajime (1985) *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*, Doctoral dissertation, University of Washington. 電子出版の予定。

◆1985年から1995年：再び雌伏のとき

Hoji氏は、1984年からマサチューセッツ大学アマースト校にて教員（日本語・言語学）となり、1987年からは南カリフォルニア大学の教員（言語学・日本語）となった。この頃から1995年頃までは、もちろん、いろいろな研究を続けてはいるものの、対外的には、比較的、活動が薄い時期である。1990年には、テニユア審査のために800ページにも及ぶ、非常に大部な原稿⁹を書き上げ、MIT Pressとの契約も果たしながら、最後の仕上げに納得が行かず、実際には出版をしなかった。ほかにも、学会等で発表しながら論文としては出版しなかったもの¹⁰も複数ある。

驚くべきことに、Hoji氏は、この時期はまだ自分が言語学者であるという明確な自覚がなかったという。もちろん、今さら日本に戻って英語の先生になろうと思っていたわけでもないが、将来のプランを明確に立てないまま、とりあえず目の前のテニユア審査をクリアしようとしていたにすぎなかったと述懐する。

ただ、ワシントン大学の時代から一貫して、「黒白をはっきりつけたい」という志向は極めて強く、この傾向は、観察においても、議論構成においても、際立っている。Hoji氏に関して「容認性判断 (judgment) について妥協しない／こだわりが強い」という印象を持っている研究者は多い。近年は、Hoji氏自身が、その「こだわり」の源についてあらためて理論的に位置づけているが、そのような位置づけが意識されるずっと以前から、この傾向は顕著であった。誰かが「こういう条件では、この解釈ができない」と報告すると、「本当に、その条件で、絶対にその解釈ができないのか」とい

⁹ Hoji, Hajime (1990) "Theories of Anaphora and Aspects of Japanese Syntax," ms., University of Southern California. 電子出版の予定。

¹⁰ Hoji, Hajime (1987) "Japanese Clefts and Reconstruction/Chain Binding Effects," a talk presented at WCCFL VI held at University of Arizona, 3/21/87.

Hoji, Hajime (1991) "Raising-to-Object, ECM and the Major Object in Japanese," a talk presented to Rochester Workshop on Japanese Linguistics, Universal Grammar, and Their Implications to Language Pedagogy and Human Cognition, 5/10/91, University of Rochester.

うことを考えずにはおられない。ひとたび、その「反例」ができると、当初は、Hoji氏の容認性判断が少数派であっても、数年後、いつのまにか、その判断が多数派になっているという経験が何度もあったという。これらの体験が、Hoji氏の観察眼の自信の源となっていたことは想像にかたくない。また、議論構成においても同様にこだわりが強く、1つの仮説を提案したら、その仮定がどういう帰結を導くかということ、自分の納得いくまで追究する。その結果、たとえ「常識」からかけ離れた一般化に行き着いたとしても、その一般化の帰結を考えたり検証を試みたりするのである。

この時期のHoji氏の研究に未発表のものが多いことと、氏のこの性向とは無関係ではないだろう。他人から見ると、それら未発表の研究は、ほとんど完成に近いものばかりである。一般的に見て、十分、公表する価値のある内容を含んでいるにもかかわらず、Hoji氏は公表に踏み切らなかった。「どうしても決着をつけたい」からこそ、いくら完成に近くても、その最後の決着がついていなければ、Hoji氏にとっては未完成としか見えなかったのである。

◆1995年から2003年：多作時代

発表論文があまりない時期を経て、一気に多くの論文が産出されたのが1995年からの数年であり、本書に納められているのは、この時期の論文である。

そのきっかけとなったのは、Hoji 1995¹¹であった。それまでは、Hoji氏の研究は、日本語の中にとどまっていたが、この論文では、日本語におい

¹¹ Hoji, Hajime (1995a) "Demonstrative Binding and Principle B," *NELS* 25, pp.255-271.

て行った観察に基づいて立てた仮説を、英語に敷衍し、その帰結を検証することに取り組むことができた。ここで初めて、氏の「黒白つけたい」という熱望にたえる研究が生まれたのである。

その勢いのまま、Hoji氏は、それまでの蓄積に基づいて、それらの「決着をつける」作業にいそしみ始める。その経緯については、田窪行則氏による本書まえがきにゆずる。

しかし、論文を量産しながらも、Hoji氏の中には次第に違和感が積もっていく。自分の発表や論文によって、これ以上ないほど問題のありかが明らかになっているにもかかわらず、必ずしも他の研究者によって、その問題が認識されていないという現実が何度となく繰り返されるためである。「なぜ、それが問題であるかどうかははっきりしていないことを扱おうとするのか?」「なぜ、すでに黒だと判明している仮説¹²を取り下げようとするのか?」——学会等の場で直接に、それらの疑問をぶつけてみることもしばしばあったが、ほぼ例外なく、はぐらかされたり、見当違いの返答がかえってきたりして議論にならない。さらに、発表者に通じないだけでなく、聴衆も、イライラするHoji氏にただとまどっていることが感じられる。Hoji氏は、このズレを解消するためには、もっと根本的な問題を解決しなければならないと考えるに至るのである。

上山あゆみ

上山あゆみ (うえやま・あゆみ)

1963年生まれ。九州大学大学院人文科学研究院准教授。

Sample

¹² たとえば、本書第7章でも言及されている「otagaiはanaphorである」という仮説がこれにあたる。

あとがき

Hoji先生に初めてお目にかかったのは、1990年の夏、関西言語学会（KLS）が主催した夏期言語学セミナーの時でした。4人の講師が1日ずつ、朝から夕方まで数時間の講義をしてくださる企画の3日目だったと思います。それまでHoji先生の論文を読んだことはありましたが、そこで取り上げられている例文がどれも「英語っぽい」ものだったため、「もっと自然な日本語を使わないと意味がない」と思っていた私は、いわば斜に構えて講義を聞き始めました。先生は、日本語で講義をするのは初めてだとおっしゃっておられ、確かに英語混じりで、ジェスチャーも外人っぽかったのですが、実に楽しそうに生き生きとご自分の観察について語られ、聴衆の意見も聞き、巻き込みつつ、1つ1つの例文を吟味していかれて、その日の午後には、私はすっかりHoji先生の話に引き込まれていました。それまではずっと、「自然な例文」でなければ判断がはっきりしないから理屈に引っ張られてしまって実感をおろそかにしてしまう、と思いついていたのですが、その日の講義に没頭させられている間に、第一印象が不自然な文であっても、さらに向き合っていくうちに、新たな感覚が生じ始め、第一印象のふらふらした感覚から、次第に安定していくのを感じました。例文の判断が自分の中で変化していくのを感じたのは、このときが初めてだったので、とても驚いたことをよく覚えています。

もちろん、すべての例文についてHoji先生の判断と同じ結果になったわけではありません。同意できる部分とできない部分とがあったので、翌日、打ち上げの懇親会のときに、自分の判断結果をお見せして、「いったいどういうことなのでしょう？」と先生に質問しました。「もう酔っ払っちゃった

から、頭が働かないなあ」とおっしゃりつつ、じっくりと私の話に耳をかたむけてくださり、まったくえらぶらないそのご様子がとても印象的でした。

ただ、その後、アメリカ留学を決意した際には、Hoji先生のところに行こうとは思っていませんでした。Hoji先生の研究姿勢は尊敬していたものの、夏期セミナーでの先生の勢いに圧倒されていたので、留学した場合、その信念の強さに何もかも押し切られてしまう気がしていたからです。

ところが、偶然、大学院に応募しなすなければならぬ状況になり、あらためて、Hoji先生に会いに行きました。その際、ちょうど本書の第1章の論文の発表の学会があったので、その準備の手伝いを兼ねて、先生の話の聞き役をしていたのですが、どこを削除するべきかで意見が食い違い、次第にヒートアップしていきました。一緒にいたかたには、まるで喧嘩をしているように見えたかもしれないと思うのですが、そのとき私が驚いたのは、Hoji先生は、強い信念と自信をお持ちである一方、こちらが真剣に申し上げることについては、メンツにこだわったり感情的になったりすることなく、ちゃんと向き合ってくくださるのだということでした。その体験のおかげで、何もかも押し切られてしまうのではないかという不安が解消され、南カリフォルニア大学への入学を決断できたのでした。

その後も、Hoji先生とは数えきれないぐらい「言い合い」をしてきています。大きな意味での目標は、あえて何も言わなくてもほぼ一致しているのですが、具体的にそれにどうアプローチするかということになると、必ずと言っていいほど意見が食い違うのが逆に興味深いところです。Hoji先生を説得するには、さまざまな根拠をあげることが必要なので、「言い合い」をするたびに、鍛えられる気がします。

Hoji先生には、「おもてうら」というものがまったくありません。相手が有名人であろうと、ペーパーの学生であろうと、態度を変えることなく、ご自分の信じておられることを語られます。そのくせ、強気／弱気／自分本位／他人思い／器用／不器用／几帳面／面倒くさがり等、実にさまざまな多面性をお持ちです。この本に所収の論文だけを読むと、その一部の特

微だけが突出して見えるかもしれませんが、Hoji先生の人となりの全体を受け取ってほしいという気持ちから、編集者の大隅さんが表紙にHoji先生の顔写真を載せることを提案してくださいました。大隅さんには、企画段階から多岐に渡る相談に乗っていただき、感謝の念に堪えません。

Hoji先生には、60回目のお誕生日を記念して、この本をお贈りしようと思っていたにもかかわらず、ぐずぐずしている間に61回目のお誕生日祝いになってしまい、申し訳なく思っております。編集作業の様々な局面で手伝ってくれた、向井絵美さん、片岡喜代子さん、深谷晃彦さん、林下淳一さん、磯山佳恵さん、まえがきを寄せてくださった田窪行則先生もどうもありがとうございました。

本書に載せた論文は、原則的には謝辞や要旨も含めて発表時のままですが、明らかにミスプリントと思われる箇所や、例文の逐語訳の付け方の不統一が目立つところについては修正してある箇所もあります。また、発表時に出版予定だった論文で、その後、確定したものについては、本文中の発表年も含めて、修正してあります。

本書のタイトルは、『言語科学をめざして』ですが、これはHoji先生の生涯に渡る目標というよりは、むしろ、本書に含まれた論文が書かれた時期に先生が意識しておられた目標です。これらの論文を量産したあと、「年譜にかえて」でも述べてあるように、Hoji先生はさらに本質的な問題に取り組み始められ、近々、その集大成が著作として発表されるご予定とうかがっています。ただ、表現の仕方はいろいろ変わってきているものの、Hoji先生が非常なエネルギーを持って注目してこられた言葉の側面は結局、不変であるようにも思います。先生の新しい著作が出版される直前に、その基盤となった時代の研究論文をこのようにまとめて出版することができ、喜ばしい限りです。今後の新しい展開が実り多いものになるよう祈ってやみません。

2013年9月
上山あゆみ

言語科学をめざして

——Issues on anaphora in Japanese

2013年11月25日 第一刷発行

著 者：傍士 元

編 者：上山あゆみ・田窪行則

発行者：大隅直人

発行所：大隅書店

〒520-0242

滋賀県大津市本堅田5-16-12 コマザワビル505号

電話 077-574-7152

振替 00930-9-272563

<http://ohsumishoten.com/>

装 幀：北尾 崇 (HON DESIGN)

印刷所：シナノ書籍印刷株式会社

©2013, Hajime Hoji, Ayumi Ucyama, Yukinori Takubo

Printed in Japan

ISBN 978-4-905328-04-9 C3080



Dies ist ein WWF-Dokument und kann nicht ausgedruckt werden!

Das WWF-Format ist ein PDF, das man nicht ausdrucken kann. So einfach können unnötige Ausdrücke von Dokumenten vermieden, die Umwelt entlastet und Bäume gerettet werden. Mit Ihrer Hilfe. Bestimmen Sie selbst, was nicht ausgedruckt werden soll, und speichern Sie es im WWF-Format. saveaswwf.com

This is a WWF document and cannot be printed!

The WWF format is a PDF that cannot be printed. It's a simple way to avoid unnecessary printing. So here's your chance to save trees and help the environment. Decide for yourself which documents don't need printing – and save them as WWF. saveaswwf.com

Este documento es un WWF y no se puede imprimir.

Un archivo WWF es un PDF que no se puede imprimir. De esta sencilla manera, se evita la impresión innecesaria de documentos, lo que beneficia al medio ambiente. Salvar árboles está en tus manos. Decide por ti mismo qué documentos no precisan ser impresos y guárdalos en formato WWF. saveaswwf.com

Ceci est un document WWF qui ne peut pas être imprimé!

Le format WWF est un PDF non imprimable. L'idée est de prévenir très simplement le gâchis de papier afin de préserver l'environnement et de sauver des arbres. Grâce à votre aide. Définissez vous-même ce qui n'a pas besoin d'être imprimé et sauvegardez ces documents au format WWF. saveaswwf.com



SAVE AS WWF, SAVE A TREE